夜回り 山田先生
西陵商ラグビー部元監督

▶15◀

猛反対乗り越え海外遠征実現

豪州の果てしない大地、特大ステーキに驚き

▼山田耕二(やまだ・こうじ)　名古屋市中区生まれの73歳。元ラグビー日本代表。西陵商(現西陵)監督として1997年、全国高校大会で愛知県勢初優勝に導く。豊田自動織機総監督を経て、現在は愛知県弥富市で老人ホームの理事長を務める。

西陵商では3年に1度、オーストラリアやニュージーランドに海外遠征していた。私は「ラグビーを通じた人間教育」を常に念頭に置いていた。国際化が進んだ今、社会に出る前に海外の文化に触れておくことも重要だと考えていた。きっかけは1990年夏。名古屋市とオーストラリアのシドニーは姉妹都市で、その交流の一環として名古屋市の高校選抜チームでシドニーに遠征した。監督を任されていた私は、現地の監督たちと名刺を交換し「来年は私の教え子たちを連れてきます」と約束してしまったのだ。

西陵商単独でのオーストラリア遠征。約束したとはいえ、当時は高校の部活動が海外遠征する前例がなかった。市議会や教育委員会からは猛反対を受けた。

「飛行機が墜落したらどうする。君の退職金だけでは賠償できないぞ」、「勝手に海外なんかに行ったら、無断欠勤扱いになるから有給休暇は認めないぞ」

私は何度も教育委員会に足を運んで直談判した。何とか許可が下り、91年に第1回の海外遠征が実現した。

現地でホームステイを体験し、生徒たちは新しい発見をたくさんしていた。果てしなく続く大地に家がぽつんと建っていた。日本ではとても食べられない、草履のように大きく、厚さ3㌢くらいある特大牛ステーキが驚くほど安く食べられた。ニワトリが少なく「ケンタッキーフライドチキン」が最高級のごちそうだった…。帰国後、生徒たちには体験記を書かせ、それらをまとめて1冊の本にした。

西陵商の海外遠征を皮切りに、岐阜県の関商工や名古屋高といった近隣の強豪校も海外遠征に行くようになった。

夜回り 山田先生
西陵商ラグビー部元監督

▶16◀

保護者も協力 ホームステイ受け入れ

ベッドは、トイレは、食事は…不安を説得で解消

▼山田耕二(やまだ・こうじ)　名古屋市中区生まれの73歳。元ラグビー日本代表。西陵商(現西陵)監督として1997年、全国高校大会で愛知県勢初優勝に導く。豊田自動織機総監督を経て、現在は愛知県弥富市で老人ホームの理事長を務める。

オーストラリア遠征では現地でホームステイさせてもらい、多くの方々にお世話になった。逆に、オーストラリアやニュージーランドの生徒たちのホームステイ先となって、西陵商で受け入れることにもなった。

まずホームステイの受け入れ先を募集するため父母会を開いた。最初は、保護者たちはあまり乗り気ではなかった。

「うちは団地。あちらのような広い家で生活している人にはかわいそう」、「ベッドだって2段ベッドです。身長の高い彼らがはみ出して転げ落ちてしまったら大変」、「食べ物も、ステーキなんてとても用意できません」。そんな声が次々と上がった。

海外の知らない人を家庭に招き入れ、数日間一緒に暮らす。不安になって当然だ。私は粘り強く説得を続けた。

「狭い家や和式トイレは日本の文化で、彼らはそういうことを体験しに来るんです。ベッド代わりに床に毛布を2枚並べれば、そこに布団を敷いて寝られます。安く手に入る鶏肉で、からあげを作ってあげれば、彼らにはごちそうなんです…」

不安が次第に解けていった保護者らは、次々に受け入れ先として名乗り出てくれた。

海外に不安を抱くのは、未知の世界だから。一度知ってしまえば、恐怖はしぼんでいき、むしろ新しい発見にたくさんの感動があるだろう。

海外遠征やホームステイ受け入れなど、異文化交流を一度でも体験すれば、異国へのハードルは一気に下がる。将来、社会人になって海外出張を任されても、一度異文化を体験しているから堂々とこなせる。再会した卒業生たちからはよく感謝される。

夜回り 山田先生
西陵商ラグビー部元監督

▶17◀

「花園」快進撃中に届けられた悲報

選手の友達が応援に向かう途中事故死

▼山田耕二(やまだ・こうじ)　名古屋市中区生まれの73歳。元ラグビー日本代表。西陵商(現西陵)監督として1997年、全国高校大会で愛知県勢初優勝に導く。豊田自動織機総監督を経て、現在は愛知県弥富市で老人ホームの理事長を務める。

私なりにチームの強化に取り組み、結果に結びつきそうな年を迎えた。1996年度の全国大会「花園」。全国では「軽量商」と冷やかされる小柄なチームながら、例年に比べると体が大きかったり、素質のある選手が多かった。普段はやんちゃで個性的な生徒が多かったが、試合になると目の色を変え、力を発揮していた。

前年度は準々決勝で山梨県の日川高に1点差で敗れた。その悔しさも忘れていなかった。初戦から順調に勝ち進み、迎えた準々決勝。「東の横綱」と呼ばれる優勝候補、東京の国学院久我山を16－8で破り、初の4強入りを果たした。

「このチームなら、もしかしたらやってくれるんじゃないか…」。そう思っていた準々決勝直後、教頭先生から携帯電話に電話が入った。

「ラグビー部の生徒の友達が、交通事故で亡くなったそう。うだぞ！　けさ、そっちに応援に向かう途中で…」

頭の中が真っ白になってしまった。事故はその日の早朝だった。私たちを応援するため、名古屋から車で大阪に向かっていた少年たちが事故に遭い、1人が亡くなった。亡くなった少年と中学時代に同級生だったメンバーが5人いた。特にスタンドオフの東谷拡史と仲が良かった。

生徒たちには黙っておこうか…。一瞬迷ったが、テレビなどの報道で知るのはもっと辛いだろうと思った。試合後、快勝に沸く彼らをロッカールームに集め、伝えた。

話し始めると、満面笑みだった彼らの表情が、みるみるこわばっていく。普段は元気で明るい悪ガキ三昧な生徒たちが、壁に額をこすりつけたり、床に伏したりして泣きじゃくった。辛い時間だった。